

『女の一生』と『ペリクリーズ』の女性登場人物を較べて
一愛を回復させる役割のロザリとマリーナー

はじめに

恋愛において実りある交際となるのは自分を向上させてくれる人と付き合うこと。これが鉄則であるのは周知の事実であるが、付き合う人により落ちていき、駄目になっていくという人が後を絶たない。交際を経て結婚に至っても、その後の人生が配偶者により大きく左右されるというのは、誰もが耳にすることではないだろうか。

自分の愛した夫により人生が大きく左右される女を描いたギ・ド・モーパッサン(Guy de Maupassant, 1850-1893)の『女の一生』(*Une Vie*, 1883)¹とウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『ペリクリーズ』(*Pericles*, 1609)²はどちらの作品も恋愛により波瀾万丈の人生を経験する主人公を描いたものである。そして両作品とも女性の登場人物が大きな役割を作品中で担っているという点で共通である。

『女の一生』を論じる際に主人公ジャンヌ(Jeanne)の夫ジュリアン(Julien)と不倫を行う召使いのロザリ(Rosalie)の作品中での重要性は、チャールズ・J・スティーバル(Charles J. Stivale)の次の言葉でも明らかではないだろうか。

For in the well-established social framework, especially within the institutions of marriage and sanctioned conjugal life, this affaiblissement (softening, weakening) is permitted, even necessary according to the Law of social relations which rules Maupassant's fiction. (128)

この良く作られた社会的構造の中で、特に結婚や認可された夫婦生活の制度の中で、この脆さ(柔らかさ、弱さ)は許されるし、モーパッサンの小説を支配している社会関係の中の法によれば、必要でさえあるのだ。

召使いという階級の差異を示す登場人物が、「社会関係の中の法」に関連し、もろい夫婦生活の中に入り込んでくる事実を考えるならば、女性の登場人物ロザリの重要性は疑う事がないのではないだろうか。

そして『ペリクリーズ』において近親相姦の秘密を見破ったものの王女の魅力に引きつけられたペリクリーズ(Pericles)について、リチャード・フィンケルSTEIN(Richard Finkelstein)が「彼女は彼が始めに順調に進んで行けなかった、誤った印であり、この失敗

こそが、多くの人が最初は彼の中に発見するものの、彼は高潔の英雄ではない事を示すものである」(“ She is a false sign around which he initially fails to navigate—and his failure asserts that he is not the virtuous hero many see in him at the start ”)(113)と述べているように女性の魔力に惑わされる人物なのである。この王女の魔性の魅力と近親相姦を見破った事が発端で経験する彼の困難を考えるならば、作品中での女性の重要性を論じる上で、よい材料になるのではないだろうか。

また、『ペリクリーズ』における女性性の支配的イメージを述べた批評家ジョナサン・バルドー(Jonathan Baldo)は以下のように述べている。「過度の涙もろさと冷淡さ、男性よりも普通女性において共通すると考えられる事だが、このことが無気力な性格を作りだしているのだ。これはペリクリーズが一度ならず示している事である」(“ an excess of moisture and cold, held to be more common in women than in men, produces a lethargic temperament, something that Pericles displays on more than one occasion ”)(175)。このように説明しているように、作品での女性の重要性は、ペリクリーズの示す女性性によっても、強化される事なのである。二人の批評家が女性の登場人物とペリクリーズに見受けられる女性的性格を説明している事を考えるならば、女性の役割を考察するのは見当違いの論題ではないであろう。³

本稿では『女の一生』と『ペリクリーズ』中の主人公に影響する女性の登場人物についての考察を対比的に行い、それぞれがどのような差異、あるいは共通点を持っているのかを明らかにしたい。フランス文学とイギリス文学、そして19世紀の作品と17世紀の作品という恐らくは互いに影響を受けていない両作品の対比研究をここで行うことにより、差異あるいは共通点の発見が、互いの作品の解釈をより深め合う事を目標にするものである。

1. 男女の愛の脆さとロザリのエンパワメント

主人公ジャンヌへの召使いロザリの影響を考察する前に、ジャンヌがどのような性格の持ち主であるかを調べてみたいと思う。修道院を出たジャンヌは理想の恋に過大に期待する女性である。相手もいないのに既にその甘美な恋の喜びを強く意識しているのである。ジャンヌの恋に対する夢想をここで引用してみたいと思う。「彼女はただ自分がその方を心から愛し、その方も自分を精一杯可愛がってくれるということを知っているだけだった」

（“ Elle savait seulement qu’elle l’adorevait de toute son âme et qu’il la chérirait de toute sa force ”）(21)というような大きな理想を描いているのである。まさに「破壊することの出来ない愛の平静さ」（“ la sérénité d’une affection indestructible ”）(22)を全く疑っていない状態である。夫と出会う以前に、恋の理想を強く描きすぎているジャンヌだが、このことはシーマ・カプラー(Sima Kappeler)が述べる「ジャンヌとジュリアンの現実の最初の出会いは、ジャンヌの愛の表現の擬人化された期待によって準備されている」（“ The actual first encounter between Jeanne and Julien is prepared by Jeanne’s anticipation of a personified manifestation of love ”）(96)事を裏付ける事と言えるであろう。

しかし、そのような現実を見る以前の恋への過大な期待は、ある意味崩れるというのが当たり前であるかのように、夫ジュリアンの二度の不倫によって「新婚当初の甘い現実が日々の現実になろうとしており、それが限りを知らない希望、未知の世界への甘美な不安に門を閉じた」（“ la douce réalité des premiers jours allait devenir la réalité quotidienne qui fermait la porte aux espoirs indéfinis, aux charmantes inquiétudes de l’inconnu ”）(90)状態となり、彼女は「一種の幻滅」（“ une certaine disillusion ”）(90)と「自分の夢の崩壊」（“ un affaissement de ses rêves ”）(90)を感じるようになるのである。

この状態においてジャンヌの関心は恋の理想から息子ポール(Paul)への溺愛というように変化していくことになる。息子ポールに対しては、過度の甘やかしによって駄目な人間に育てるばかりでなく、後にポールが成人してからは度重なる金の無心によりジャンヌ自身も疲弊していくことになるのである。溺愛が彼女自身の不幸の原因を作ったと言える。恋への過大な期待によってジャンヌは不幸になったが、子への溺愛によってもジャンヌは不幸になるのである。

ジャンヌの母親も不倫をしていたことが、彼女の死去後、隠してあった手紙の中において、ジャンヌは知ることになるのだが、母親も夫との満たされない愛という点では、ジャンヌとジュリアンの関係に似ていると言えるかもしれない。そしてジャンヌの母親も娘であるジャンヌに対しては、同じように深い愛情を示すのである。夫ジュリアンの不倫の現場を目撃し、半狂乱で雪原に飛び出したジャンヌであるが、助け出されベッドで目を覚ました娘に対して、「いい子だから、おやすみ落ち着くんですよ、さあ眠ろうとしてごらん」（“ Dors, ma mignonne, calme-toi, eesaye de dormir ”）(125)と小さい子をあやすような話し方で語りかける母親である。ジャンヌが夫は不倫をしていると話すにもかかわらず、お前は病気が酷かったんですよ、というばかりである。自分の不倫の経験とジャンヌの夫の

今回の不倫が重なり、母親も苦しい思いをしているのである。しかし、子に対する愛情は「嬢や、私のかわいいジャンヌや」(“Ma fille! ma Jeanne chérie!”)(124)等の言葉に代表されるように揺るぎないものなのである。

ジャンヌ自身とジャンヌの母親に代表されるように、男女の愛の脆さ、理想の裏切りというのがこの作品では支配的であるが、子に対しての愛情は強いものであるという事が分かるであろう。ジャンヌもそして彼女の母親も、子に対しての中心的愛情という点では変わりがないのである。ジャンヌ自身の子への過剰な愛情によって、身を滅ぼしていく過程を考えると、ジャンヌの母親も夫への裏切りを行っており、悲しい思いをしたジャンヌ自身が余計に裏切る事のない存在として、自分の息子ポールに対して溺愛していくと考えるのは、無理な推論ではないだろう。ジャンヌは男女の愛の裏切りと理想の崩壊に対して強い反応を示すのである。それゆえ、息子は裏切る存在ではない、と信じるのである。この強烈な子に対しての期待すら裏切られる時、ジャンヌの人格が崩壊してしまうのは当然の事と言えるであろう。

愛の理想という想像力、そして自分を裏切るはずはないという息子に対しての期待に重きを置くジャンヌは、現実に根ざした人物とは言えない。息子ポールが成人した後、何度も金の無心に応じてしまう彼女の態度は、実際的な解決を息子にとっても彼女自身にとってももたらすことはない。⁴ただ息子を駄目な人間へと変化させ、そして彼女自身も財政的に苦しくなるばかりである。この現実を見ないジャンヌに対して、百姓らしい力強さともいべき召使いのロザリはジャンヌとの再会の後、現実的手段により状況の打開を試みるのである。再会后1週間でロザリの取った行動をここで引用してみたいと思う。

Rosalie, en huit jours, eut pris le gouvernement absolu des choses et des gens du château. Jeanne résignée obéissait passivement. Faible et traînant les jambes comme jadis petite mère, elle sortait au bras de sa servant qui la promenait à pas lents, la sermonnait, la reconfortait avec des paroles brusques et tendres, la traitant comme une enfant malade. (229)

ロザリは1週間で家中の人と物の絶対的な支配権を握った。ジャンヌは諦めて、受け身に服従していた。弱くなり昔母親がやったように、脚を引きずりながら女中の腕にしがみついて外出した。ロザリはゆっくりジャンヌを散歩させながら、お説教をした

り、乱暴だがしかし優しい言葉で力をつけたりした。まるで病気の子供を扱うみたいなやり方だった。

決して丁重なやり方ではないかもしれないが、ロザリは現実的な手段により、ジャンヌを救おうと試みるのである。ポールへの金の送金はもうしないということをジャンヌに約束させ、「ロザリは毎日フェカンまで出かけ、知り合いのある公証人から一切の事態を説明してもらおう」(“*Rosalie fit chaque jour un voyage à Fècamp pour se faire expliquer les choses par un notaire qu'elle connaissait*”)(229)という行動により、精算すれば8000フランの年収が残るという計算を出すのである。ジャンヌには決して出来なかった金銭に関する具体的解決策を提案するのである。確かにロザリはそれまでのジャンヌのやり方は拒絶する。しかし、彼女は古いやり方に変化をもたらし、新たな解決策をもたらすのである。アンドリュー・J・カウンター(Andrew J. Counter)は、モーパッサンの小説の階級に言及しているが、彼の「したがって否定とはブルジョア階級のある退廃的な偽物の産物ではなく、むしろ歴史を超越する社会の必然性なのである」(“*Disavowal is thus not the product of some decadent bourgeois inauthenticity, but rather a transhistorical social imperative*”)(695)という言葉は、階級が召使いという立場にあり、低い身分のロザリが新しさをもたらす存在というのを説明する言葉ではないだろうか。ロザリのそれまでのやり方の否定は、新しく出てくる階級の力であり、真実味がそこにはあるのである。

息子に裏切り続けられるジャンヌを説明する言葉は停滞と過去である。ジャンヌは外出しなくなり、体を動かさず、朝起きると、窓から空模様を眺めてから、食堂に降りて行って暖炉の前で1日中妄想にふける、という生活をするようになる。「彼女は何よりも過去に生き、しかも遠い過去に生きる」(“*Elle revivait surtout dans le passé, dans le vieux passé*”)(255)ようになってしまうのである。このような停滞と過去を特徴とするジャンヌに対してロザリの示す特徴は、能動性と新しさである。家に伝わる曾祖父の代からの品々に対してジャンヌは埃まみれにもかかわらず強い愛情を示すが、ロザリに言わせれば「こんなに汚い物」(“*ces saletés*”)(235)に過ぎず、怒りながら処理する物に他ならないのである。こうした事にも過去を否定し、新しさを優先させるロザリの姿が浮かんでくるのではないだろうか。そしてロザリは息子に会えず嘆き続けるジャンヌに対して、働かなければならない身分だったらどうお考えなのですか、と強い言葉で励ますのである。「いつの世だって別れねばならない時はあります。年寄りと若い者はいつまでも一緒にいるようには出

来ていませんよ」(“ Il y a toujours un moment où il faut se séparer, parce que les vieux et les jeunes ne sont pas faits pour rester ensemble ”)(257-8)という厳しいかもしれないが、現実的な教えは、ジャンヌにとってまさに必要なものなのである。そしてジャンヌの息子ポールを完全に拒絶するわけでもなく、彼に会えるような手段も講じるロザリである。ロザリの現実的手段は、打ちひしがれたジャンヌにとっては、厳しいが必要な力なのである。

ロザリのジャンヌに対しての働きは力を与えようとする存在、エンパワメントの存在に他ならない。かつては夫の不倫相手だったロザリだが、再会の後はジャンヌに対して現実的な解決策をもたらす人物なのである。夫との恋愛と結婚の幻滅、息子ポールの裏切りという理想の崩壊の後、ロザリはジャンヌに対して能動性と新しさによって、状況の打開を試みる存在なのである。警告者という立場によって、ロザリはジャンヌの窮地を救う人物になっていると言えるであろう。

2. 追従の悪と追従しない女性の感化力

『ペリクリーズ』の劇の起こりはアンタイオカス(Antiochus)王の娘の美しさにペリクリーズが引きつけられるという恋愛である。ペリクリーズが自分の嫁にしたいという甘い感情から劇の始まりとなるのである。美の女神すらアンタイオカス王の娘には臣下となり、姿は春そのものである、と述べるペリクリーズである。まさに恋の喜びに夢中になっているという様子を見せている状態であろう。ペリクリーズのこの感情に嘘はなく、裏切りという言葉は全く見当違いと言える。

しかし、実際にはアンタイオカス王とその娘は近親相姦の罪を犯しているのであり、ペリクリーズは王の娘に出会った瞬間から感情を裏切られている、と言えるであろう。ペリクリーズによるアンタイオカス王の娘に対しての賛美は、全く的外れなのである。醜悪なものに対して最大の賛辞を贈っているペリクリーズは裏切られているのである。この近親相姦の秘密を見破った時のペリクリーズの言葉をここで引用してみたいと思う。

Pericles

If it be true that I interpret false,

Then were it certain you were not so bad

As with foul incest to abuse your soul,

Where now you're both a father and a son

By your uncomely claspings with your child—
Which pleasures fits a husband, not a father—
And she an eater of her mother's flesh
By the defiling of her parents' bed,
And both like serpents are, who though they feed
On sweetest flowers, yet they poison breed. (101)

ペリクリーズ

もし私が間違って解釈しているのなら、
お前はそんなに悪くないというのは確かだ。
魂を汚すおぞましい近親相姦をするようなことはせずに。
しかしお前は父であり、息子なのだ。
けしからぬ自分の子を抱くことによってだ。
そこから得る快樂は夫のものであり、父のものではない。
そして娘も母の肉を食らう生き物なのだ。
自分の両親のベッドを汚す事によって。
二人は蛇のようだ。こういう
かぐわしい花々を餌食にしながら毒を醸し出している。

父として取るべき態度ではない近親相姦、そして娘として取るべき態度ではない近親相姦。いわばお互いの義務を放棄した、裏切り合っている状態のアンタイオカス王とその娘である。そしてペリクリーズ自身も二人に裏切られている状態である。この秘密を見破ったペリクリーズが命を狙われるようになる事を考えるならば、劇の起こりの設定は主人公ペリクリーズにとってマイナスであり、ペリクリーズの愛したアンタイオカス王の娘もマイナスの存在であると言えるであろう。

追従とは機嫌を取りながらも相手に対してマイナスの働きをする態度である。アンタイオカス王とその娘は父と娘でありながら、夫婦のような状態にあり、互いに快樂を与えている状態である。いわばマイナスの結果を生み出しつつ、喜ばせ合うという追従にも似た行為を行っているのである。この互いの追従の結果が悪しきものであるのは、倫理の上でも明らかである。追従の危険について、ペリクリーズは「あの罪深い父親は/私を打ちのめそうとするのではなく、和らげているようだった」(“ the sinful father/Seemed not to strike,

but smooth ”)(107)と述べつつ、「暴君が口づけしようと思せかけている時こそ、恐れねばならない」(“’Tis time to fear when tyrants seems to kiss ”)(107)と自覚しているように、警戒しなければならないものなのである。追従とは自分に対して大きな被害をもたらすものになり得るのである。

アンタイオカス王の娘は近親相姦の親子の裏切りという追従で、ペリクリーズに災難をもたらす存在である。追従の悪は女性の魅力という衣をまといつつ、ペリクリーズを窮地に追い込むのである。この劇の起こり、ペリクリーズの恋愛は追従の悪のもたらす災難であり、追従する女性の悪が表現されていると言える。女性の追従という隠れた裏切り行為が劇の起こりとして特徴的なのである。

ペリクリーズにマイナスの結果をもたらすのが、アンタイオカス王の娘だとしたら、反対にプラスの結果をもたらす存在なのは、ペリクリーズの娘マリーナ(Marina)である。マリーナはどんな逆境にあっても運命に屈しない勇気を持ち主である。海賊にさらわれて女郎部屋に売り飛ばされた後も、自分自身を失わず女郎部屋のおかみやその下で働く人間に抵抗を見せるのである。卑屈な態度で自分を守ろうとする追従とは正反対の行動を取る、と言えるであろう。マリーナは自分が危うい状態になったとしても、自分の信じた行為をやりぬく人物となっているのである。そればかりか、彼女の行為は浄化の作用をもたらすのである。女郎部屋でマリーナが客に対して取った態度とその結果をここで引用してみたいと思う。

First Gentleman Did you ever hear the like?

Second Gentleman No, nor never shall do in such a place as this, she being once gone.

First Gentleman But to have divinity preached there—did you ever dream of such a thing?

Second Gentleman No, no. Come, I am for no more bawdy houses. Shall's go hear the vestals sing?

First Gentleman I'll do anything now that is virtuous, but I am out of the road of rutting for ever. (192)

紳士1 こんなの聞いたことあるかね。

紳士2 いいや、こんな場所であんなめに合うなんてもうないだろう。あ

の女がいなくなってしまうばいいのに。

- 紳士 1 ここで神聖なお説教を聞かされるとはなあ。思いもよらなかつたよ。
- 紳士 2 全くその通りだ。もう女郎部屋には行きたくないよ。これから尼さんの賛美歌でき聞きに行くか。
- 紳士 1 清く正しい事なら何でもやるよ。女郎遊びはもうおしまいだよ。

売春する場所でマリーナがした行為は客に説教をするというものである。客としては上のように不満をもらしているが、その結果はどうであろう。この二人の客は売春はもうしないという気持ちになったのである。これが望ましい方向への転換であるのは明らかであろう。マリーナの強さは浄化の作用をもたらすのである。

さらにマリーナの浄化という感化力は女郎部屋の従業員ボルト(Bolt)にも及ぶ。戦場で足一本を失ったボルトが他に出来る仕事はないと嘆くにあたり、マリーナは今の仕事以外だったら何でもいいと諭す。マリーナは稼いだ金は全てあげるから、女郎部屋から救い出して、教える事で稼がせて欲しいとボルトに頼むのである。マリーナをレイプしようとしたボルトは、「そうか、お前に対して出来る事をやってみるよ。良い口が見つけれればな」(“ Well, I will see what I can do for thee. If I can place thee, I will ”)(206)と考えを変えるのである。レイプしようという考えとは正反対の「できる限りの事はお前にやってみるよ」(“ I’ll do for thee what I can ”)(206)という親切を見せるのである。まさにマリーナの浄化作用ともいべき結果である。モーリス・ハント(Maurice Hunt)は『ペリクリーズ』中に表わされる優しさの表象を「それらの優しさはキリスト教の慈悲の含みを得ている」(“ their kindness acquires overtone of Christian charity ”)(300)と説明し、例えば「ペリクリーズも同様に3人の漁師の親切という慈悲に、生き返らされている」(“ Pericles similarly is revived by charity, the kindness of three fishermen ”)(300)としているが、マリーナに対してもこのキリスト教の慈悲はあてはめて説明することができるのではないだろうか。マリーナの示す優しさによって救われるのは、不遇の立場にあるボルトであり、そして売春の悪に染まった女郎部屋の客たちなのである。マリーナは被害者の立場から、導く存在として教育者のエンパワメントを行っていると言えるであろう。

ペリクリーズは自分の娘マリーナに接して心を開くようになる。娘だと分からないうちから、お前の言葉なら信じる、仮に話があり得ぬ事だとしても自分の耳に信じさせてみせる、とまで言うようになるのである。誰の言葉も聞かず、王の職務を投げ出して悲しみに

ふけていたペリクリーズを救ったのは、マリーナなのである。彼女の感化力はこの劇の主人公ペリクリーズにも及んでいる。これもマリーナの導く力、エンパワメントとみなしていいだろう。

ペリクリーズは劇の起こりにおいても劇の終末においても女性に影響される人物である。近親相姦の汚れによって自分の運命が左右され、そして救われるのは自分の娘の浄化力のあるエンパワメントによってである。⁵近親相姦が人間の弱さから発するものならば、マリーナのエンパワメントは彼女自身の強さから発せられるものである。ペリクリーズの一生は女性から影響され、アンタイオカス王の娘という追従する存在が死去する事で、マリーナという追従しない存在の正しさが明らかになるのである。ペリクリーズの一生を形作る女性の中心的役割は、良くも悪くも明らかではないだろうか。

結論

『女の一生』は主人公ジャンヌが現実押しつぶされる悲劇的物語という評がなされる事が多いが、作品の最後を見るとかすかな希望を感じ取る事も可能である。孫を抱くジャンヌを包み込む周りの状況をここで引用してみる。

Le soleil bassait vers l'horizon, inondant de clarté les plaines verdoyantes, tachées de place en place par l'or des colzas en fleur, et par le sang des coquelicots. Une quiétude infinie planait sur la terre tranquille où germaient les sèves. La carriole allait grand train, le paysan claquant de la langue pour exciter son cheval. (266)

太陽は地平線に傾き、ところどころ花が咲いている菜種の金色とひなげしの血色で染まっている緑色の平原を明るくしていた。命の液が伸びようとしている静かな大地に、無限の平静さが広がっていた。農民が馬をせき立てようと鞭を打つと、馬車はどんどん走り出した。

明るい風景と金色、赤、緑という華やかな色彩、そして疾走する馬という動的な風景。どれをとっても、孫とジャンヌの将来を明るいものとする風景ととらえる事ができないだろうか。ここで感じさせるのは、悲劇ではなく希望の未来なのである。ロザリの「おわか

りでしょう。人生とは人が思うほど、そんなに良くもないし悪くもないんですよ」 (“ *La vie, voyes-vous, ça n’est jamais si bon ni si mauvais qu’on croit* ”)(267)という言葉も辛い思いをしてきたジャンヌにとっては励みになる言葉であり、心持ちで人生はいかようにもなる、という未来を期待させるには十分である。つまり、結末は一般に考えられているように悲劇的ではないのである。

では、『ペリクリーズ』の結末はどうであろうか。ペリクリーズは妻と娘に再会して「過酷な運命に襲われようとも/美德はついに破壊の嵐を切り抜け/天に導かれて栄冠の喜びを手に入れた」 (“ *Although assailed with fortune fierce and keen, / Virtue preserved from fell destruction’s blast, / Led on by heaven, and crowned with joy at last* ”)(228)となるのである。この状況を作ったのは堅く心を閉ざしたペリクリーズの態度を和らげる事に成功した娘のマリーナなのである。ペリクリーズが被害者という特徴を有しているのであれば、マリーナは人に良い影響を与える活動性を特徴とする人物である。この事はジャーニー・グラント・ムーア(Jeanie Grant Moore)の「マリーナはその活動性において受け身のペリクリーズと対照をなしている。彼女は忍耐力があり必要な時には行動する力も持っている」 (“ *Marina, in her activity, provides a contrast to the passive Pericles. She has patience but also the capacity to act when necessary* ”)(40)という言葉で強化できる考え方であろう。

この論分の目的は『女の一生』と『ペリクリーズ』のそれぞれの主人公に影響する女性の役割を対比させることであり、『女の一生』においては召使いロザリ、『ペリクリーズ』においてはマリーナに注目してみた。確かにロザリはジャンヌの夫の不倫相手であったが、主人公に再会した後は、ジャンヌとは違った現実的手段により状況の打開を試みて、先に述べたジャンヌと孫の新しい生活を始めさせる力となったのである。ジャンヌが経験した男女の愛の皮肉はロザリによって最後は孫のある生活という親子の愛に変容していると言えるであろう。息子から裏切り続けられた親子の愛も、孫と息子と一緒に生活という未来を感じさせる結末により、最後には回復するのである。ロザリの現実的手段は主人公ジャンヌに肯定的人生を暗示させるのである。

『ペリクリーズ』のマリーナも主人公ペリクリーズの態度を和らげる事により、愛の回復に成功する人物である。ペリクリーズが劇の起こりで経験したアンタイオカス王の近親相姦の汚れは、最後には妻と娘との一緒に生活が約束され、男女の愛、そして親子の愛の両方の愛によって浄化されるのである。『女の一生』のロザリも『ペリクリーズ』のマリー

ナも失望から希望を与える役割を担っているという点で共通しているのである。浄化の働きを両者がしている点で一致を見るのである。これが、本稿の目的である『女の一生』と『ペリクリーズ』のそれぞれの主人公に影響する女性の対比研究の結論である。失われた愛の回復をもたらすという点で共通であろう。

互いの作品の影響を調べるフランス派、互いに影響を及ぼしていない作品の対比を行うアメリカ派などという比較文学の区別がかつてはなされた事があるが、ここで行ったのは当然、互いの影響を考慮に入れないアメリカ派の研究方法である。しかし、最近の比較文学の潮流を見てみると、比べてさえいけば、作品どうしのみと比較だけでなく、どのような事象を扱っても比較文学の研究であるという広い考え方に変わりつつあるようである。批評が主流の現在の文学の流れが望ましい事なのかどうかはわからないが、どのようなアプローチであれ、文学の批評と研究が、文学そのものの価値を高めるものと信じて疑わない筆者である。

註

1. 以下、『女の一生』からの引用は Guy de Maupassant, *Une Vie*, Gallimard, folio plus classiques シリーズの 2015 年の版による。
2. 以下、『ペリクリーズ』からの引用は William Shakespeare, *Pericles*, Oxford University Press, The Oxford Shakespeare シリーズの 2008 年の版による。
3. ここでは詳しく述べていないが、クリーオン(Cleon)の妻ダイオナイザ(Dionyza)のマリーナに対しての嫉妬も劇中で重要な要素となっている。ダイオナイザという女性のマリーナに対しての扱い方によって、運命が大きく動かされるのである。女性の劇中での役割の大きさがこの点でも明らかであろう。
4. このジャンヌの金に対しての無節操さは育った環境にも影響を受けている。彼女の両親も金に対して無関心であり、容易に与えうるというのを彼らの生活の大きな幸福としているのである。第1章で両親のどちらかが、しょっちゅう「どうしてこうなったか分からないが、今日も100フラン使ってしまった。何も大きな買い物はしていないのに」(“ Je ne sais comment cela s’est fait, j’ai dépensé cent francs aujourd’hui sans rien acheter de gros ”)(15)という発言がなされるという説明があり、彼らの持金を干上がらせているのである。
5. 航海を人生にたとえるのなら、嵐にあいながらも幸福を手に入れるペリクリーズは、人生の苦難を切り抜けて平穏さを手に入れた人物であると言える。デイビッド・ソルウェイ(David Solway)は一連のペリクリーズの苦難の経験を彼が大人になるために必要なもののだとして、結末を成熟した「ペリクリーズの成人」(“ Pericles’ coming of age ”)(93)という言葉で表現している。

引用・参考文献

- Baldo, Jonathan. "Recovering Medieval Memory in Shakespeare's *Pericles*." *South Atlantic Review*, Vol. 79, No. 3-4, John Gower ([2014]),
<https://www.jstor.org/stable/10.2307/soutatlarevi.79.3-4.171>, pp. 171-189.
- Bowles, Thelma. "THE STACKED DECK: A STUDY OF TECHNIQUE IN MAUPASSANT'S NOVELS." *Romance Notes*, Vol. 36, No. 1 (Fall, 1995),
<https://www.jstor.org/stable/43802326>, pp. 55-62.
- Counter, Andrew J. . "The Epistemology of the Mantelpiece: Subversive Ornaments in the Novels of Guy de Maupassant." *The Modern Language Review*, Vol. 103, No. 3 (Jul., 2008), <https://www.jstor.org/stable/20467905>, pp. 682-696.
- Finkelstein, Richard. "Pericles, Paul, and Protestantism." *Comparative Drama*, Vol. 44, No. 2 (Summer 2010), <https://www.jstor.org/stable/23038108>, pp. 101-129.
- Hunt, Maurice. "Shakespeare's 'Pericles' and the Acts of the Apostles." *Christianity and Literature*, Vol. 49, No. 3 (Spring 2000), <https://www.jstor.org/stable/44312773>, pp. 295-309.
- Kappeler, Sima. "The Return of the Stranger: Maupassant's *Une vie*." *Dalhousie French Studies*, Vol. 30 (Spring 1995), <https://www.jstor.org/stable/40838192>, pp. 93-106.
- Maupassant, Guy de. *Une Vie*. Ed. Delphine Morel Vacher, Gallimard, 2015.
- Moore, Jeanie Grant. "Riddled Romance: Kingship and Kinship in 'Pericles'." *Rocky Mountain Review of Language and Literature*, Vol. 57, No. 1 (2003),
<https://www.jstor.org/stable/1348033>, pp. 33-48.
- Moreau, John. "Maupassant's Empty Frame: A New Look at 'Boule de Suif'." *French Forum*, Vol. 34, No. 2 (Spring 2009), <https://www.jstor.org/stable/40552555>, pp. 1-16.
- Shakespeare, William. *Pericles*. Ed. Roger Warren, Oxford University Press, 2008.
- Solway, David. "'Pericles' as Dream." *The Sewanee Review*, Vol. 105, No. 1 (Winter, 1997), <https://www.jstor.org/stable/27548302>, pp. 91-95.
- Stivale, Charles J. . "Duty, Desire, and Dream: Maupassant's 'La Petite Roque'." *The Journal of Narrative Technique*, Vol. 20, No. 2 (Spring, 1990),

<https://www.jstor.org/stable/30225950>, pp. 120-133.

Thomas, Sidney. "The Problem of Pericles." *Shakespeare Quarterly*, Vol. 34, No. 4 (Winter, 1983), <https://www.jstor.org/stable/2869863>, pp. 448-450.

Tralie-Poteau, Mary. "Moving beyond the Real: Maupassant's Aborted Flight to Mars." *The French Review*, Vol. 77, No. 3 (Feb., 2004), <https://www.jstor.org/stable/25479392>, pp. 538-547.